

---

# ナルトなのに大蛇丸

茶摘み鶏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナルトなのに大蛇丸

### 【Nコード】

N5351T

### 【作者名】

茶摘み鶏

### 【あらすじ】

寝て起きたら大蛇丸になっていたのは、なんとナルト。

けどこのナルトただのナルトじゃない。

大蛇丸になったのが、ただのナルトじゃつまらない。原作そのままでも、すれたナルトでも面白くない。そんなわけでこのナルト、実は前世の記憶をもったままの成り代わり主。

そんなナルトが逆行してたどり着いたのは、なんと過去の世界。それも大蛇丸に成り代わっていた!?

ナルトな転生者が、さらに成り代わってしまった。そんな【もしも】

が複数かけあわされた異端な物語。  
それを確認したうえでご覧ください。

## 00 うずまきナルトな人生（前書き）

この物語はナルトに転生した人物が、大蛇丸になってしまおうという・  
・有り得なすぎる【もしも】ワールドです。

ナルト主が主人公な別のストーリーは、また違う場所で公開中です。  
なお作品はあくまで作者の願望によって生まれた【もしも】話なので、有り得ないと思うようなことが多々あるかもしれませんが、そこはどうか笑ってスルーしてください。

ひたすらギャグを目指しているので、完全に原作破壊になってしまいます。なお作者は国語能力ないので、いつもどおり「一人称」視点で物語りは進みます。

同作者による投稿済みの『飴色疾風伝』で「クロフデアザナ」という人物が出てきますが、作者に名前センスがなく、そのために同姓同名なだけであり、物語自体には一切関係もつながりもありません。上記のことが一つでも許せない方はユー・タンを。

それらを踏まえたうえで読みくださいますようお願いいたします。

## 00 うずまきナルトな人生

オレはうずまきナルト。

前髪の一部が赤いメッシュで、封印術と医療忍術が得意だ！

え？ “うずまきナルト” と違いすぎるって？  
そりゃあ、そうだろう。

だって。しょせんオレは、前世の記憶があるので、“成り代わり”  
というやつだ。

その成り代わりの影響なのかここが原作とことごとく違う世界だからなのかわからないが、オレは『うずまき』の血が濃いので、前髪の一部が赤いメッシュになっているし、原作のナルトのように多重影分なんかできないから。

あっはっは。

だめだめだよな。

たしかにオレだって NARUTO は知っているよ。  
オレと“本当のナルト”じゃ違いすぎるのもわかる。

それでもこの世界のナルトはオレなんだ。

前世ではこの世界のことは、NARUTO という漫画になっていたから、ある意味では未来を知っていることになるけど、この世界は原作と違いすぎるし、まずオレの記憶力があいまいで、原作知

識とか無意味だ。

前世の記憶がある　だから、オレには『ナルト』という名前以外に、もうひとつ名前がある。

クロフデ　アザナ。

これは前世のオレの名前だけど、とりあえずこの世界では偽名のときにのみ使っている。

さて。オレのことを話すには、長くなってしまうので、ある程度割愛させてもらう。

実のところオレの転生理由は、ひとつ。

死んだから。それも友人と遊びに行った先のデパートで爆発事故に巻き込まれてね。

死んだのは間違いなくて、そして何度か転生もしている。

その記憶が全部ある。

かなりあいまいだけど。まあ、あるにはあるのだから嘘じゃない。

どんだけ転生しまくったとか言われても・・・「数え切れないほど」としか言いようがないのが現実だ。

とりあえずどう転ぼうが、おかしかろうが、この世界のナルトは“オレ（クロフデ　アザナ）であることだけ覚えておいてほしい。

この世界の“うずまきナルト”は、前世の記憶とその影響を（若干）持ったまま生まれたが、所詮ナルトにかわりはないと考えてくれればいい。

つまり、成り代わりというより、オレ自身がこの世界でのナルトなんだってこと。

“アザナ”の来世がナルト。

“ナルト”の前世がアザナ。

それだけのことだ。

ただ、それだけというには、オレは前世の記憶があったりと、いろいろイレギュラーすぎるけれど・・・。

まあ、簡単にいってしまえば、ここはNARUTOはNARUTOの世界でも平行世界というやつだ。

この世界のナルトには、前世の記憶がある。  
前世の経験をかせる。

原作と違った流れを歩む世界。

それだけ認識してくれば、オレを含むこの世界はまわる。

はなししておかなければいけないのは、ふたつ。

まずオレの能力だ。

前世の記憶があるせいか、本当にオレってやつは原作のナルトらしくないんだ。

他の世界ではチャクラはなかったが、「気」や「オーラ」などと呼ばれる生命エネルギーをわざとして使うチャクラに近いものがあった。

おかげでオレは、ナルトになったあと、チャクラはないのに、チャクラコントロールだけは抜群にできた。

そのコントロールの影響で、気に敏感なオレは、ついに肉眼でチャクラの“流れ”が見えるようになった。

ちなみに特典はコレだけである。

そしてオレがいることで変わってしまった流れについて。

転生したオレが一番最初にしたのは、九尾とマダラをしめること。前世の能力なんか付属されてないし、転生得点は『なぜか修行してもチャクラが増えない』ことだったので、得点というよりも不利益にしかない。

なので、精神世界でまず九尾を、精神世界で捕獲し、オレのないチャクラの供給源の代わりになってもらった。

つまり、オレと九尾は仲良しということだ。

そんなこんなで、オレがナルトとなった世界は、凄く平和で、物凄く人口密度がいつも多かった。

だって死ぬ人がみんな生きてたんだから当然といえよう。

筆頭は四代目夫婦が健在であること。

そしてここからが世界の修正とでもいうべき段階。

原作との違いだ。

まず波風ミナト 彼は“自分の息子がマダラのような悪党に狙われていた”ことが発覚した後、なにを血迷ったか、心配性が間違った方向に進み、物凄い過保護に進化を遂げた。

それでいつもオレは父ちゃんに追い掛け回されてるし、父ちゃんは四代目火影だからって暗部（火影直属の部隊）が迎えに来る。仕事



をしてくれと。

あれはみていて暗部さんが痛々しい。

さらには、母 うずまきクシナ 彼女の料理はたしかにうまい。うまいのだが、彼女が作る菓子という西洋菓子は、なぜか謎の生命体となるという七不思議。

おかげで木の葉の里中であるとき甘いチョコレートの匂いが蔓延し、奇声を上げて酸を吐き出す茶色の生き物がかつぽするなど……・被害は甚大である。

大蛇丸はオレの必死の頼みで里に残ってくれている。

今は母さんが作る謎の生命体となる菓子を処理してくれる里のヒーロとかしている。

そうそう。原作で話題を呼んでいるうちは一族だが、あれらと里は和解し仲良しだ。

ついでに、日向ツインズは両方とも顕在である。

なぜならオレと父さんによるおいかけっこの最中、ヒナタ誘拐事件なるフラグをうっかり踏み潰してしまったので、双子は二人そろって健在で、うちの父にふりまわされてヒーヒー言っているが楽しそうに人生を謳歌している。

ちなみにダンゾウや根は、四代目たる父ちゃんが制圧した。

暁なんて、慈善集団の最前線だ。

三代目は四代目が生きているので、日々有意義に老後を暮らしている。

ちなみにサスケは極度のブラコンで、里抜けなんかするはずもなく、普通にまだいる。

それにこの世界には音の里がないから当然といえば当然かもしれない。

ついでにサスケは途中から原作と同じように、オレとは班がわかれサイが七班になっている。

なぜかという、金色の父ちゃんの奇行を知る数少ない存在のなかで冷静な判断を下せる彼は、ついに暗部に指示を出すまでになり、

いまでは暗部にたのまれ彼らを指揮し、日がな一日オレをおいかけまわす超過保護な波風ミナトを火影の椅子に戻らせるべくサクを張り巡らしている。

サクラちゃんは綱手の弟子となつたので、パワーがハンパない格闘センス抜群の忍者になつた。

医療忍者としても優秀だけど、彼女は最近、対四代目火影用に格闘にこつているので怒らせたら一番危険な存在となっている。

そしてオレ。うずまきナルトは、チャクラコントロールを生かした医療忍者になった。

でも得意なものは、うずの国の封印術。

だってオレは赤メッシュのナルトだからね。

この世界　　本当にちがいすぎる。

そういえば16歳ぐらいのころ、ヒルコの『血継限界奪つて第三次忍界大戦おこすから力カシをくれ』なんて事件もあつたけど、「命を大事にしない一番の大バカ力カシ」にぶちぎれた父ちゃんが避雷針の術で乗り込んで、あげくオマケとしてつれてかれたオレは九尾を開放させられ　　まあ、戦争とかそういうことはなく、ことなきをえたのかな。

あと砂の任務で、過去の父ちゃんと出会って散々な目にあつたりとか。

それを里に帰って思い出した親父と、さっそくバトルをしたり。

なんかいろいろあつたなあ。

まあ、オレのいることで変わりつつも流れた時間はそんな感じだ。

そんな（とにかく人口密度が激しく多い）世界で、大人になった赤  
メッシュな『うずまきナルト』なオレ クロフデ アザナ。

ただいま六代目火影です。

物凄く疲れています。

なにつて・・・

書類整理に。

恐るべし火影の仕事！

忍具を持つより、ペンをもっている時間の方が長い。

うでいて〜。

「寝ていいかな？つてか、もう徹夜何日目だおい」

隈がくつきり浮いているだろうオレの顔。

そのまま書類を見ているうちになんだかめまいまでしてきて

オレはその日、ペンを手にしたまま意識を失った。

それが長い長い夢の始まりとは気付かずに。  
悪夢は寝不足のせいだ。  
きっとそうだと・・・そう思いたい。

## 00 うずまきナルトな人生（後書き）

主人公はナルト成り代わり主です。  
それを前提において置いてください。

## 01 大蛇丸に成り代わり

おはようと起きたら小鳥がピピピと歌を歌いながら挨拶をしてきて  
優しい花の香りが鼻をくすぐる  
窓を開けたらそこはおとぎの森  
さあ、朝の挨拶をしよう

おはよう

その掛け声で妖精が

「起きたら謎の実験器具がピッピッと脈を刻むような音を立てています。」

錆びた鉄のようなにおいと薬のにおいが混じった悪臭で鼻をふさぎたくなります。

窓を開けても外はじめつとした真っ暗な森の中。

自力で目覚めたオレの目に一番最初に飛び込んできたのは死体でした」

どんだけだよこの状況。

\*\*\*\*\*

黒筆アザナ。もといわずまきナルト。  
寝て目が覚めたら

「ありえねーありえねーありえねー！！ありえねーってばよお！！  
なんだこれは！？」

寝て、起きたらそこは知らない天井で、知らない部屋。  
つというか、なにかの実験室らしく、くだにつながって機械音を立  
てている人一人はいりそうな巨大な試験管が数本。

むしろ中にひとが入っているのはもうこのさい見てみぬフリをしよ  
う。

さらにいうと、壁には鎖につながれた死体。  
テーブルらしきものや床には、黒ずんだ血の痕と、なにかを書き記  
した書物の山。

ハイ。どこからどうみても実験室ですよ。  
それもかなり猟奇的な。

「・・・・・・・・」

って

「なんだそりゃー！！！！！！」

めちゃくちゃ戸惑いつつもとりあえず自分の姿を確認しようと、周囲を見回し、やっぱり鼻につく匂いに頭が痛くなる。

でも自分の姿を確認しないといけない気がする。

だって自分の中に九尾の気配がないし、なんか身体も違和感があるし・・・むしろ目の前にたれているものが黒くて、オレの髪が黒いつてことにどうしようもない嫌な予感がするわけで。

鏡を探して、とりあえず身近にあった試験管を鏡代わりに、そこに映ったものを見て、一気に血の気が引いた。

黒くてサラサラの長い髪。

少し色の白い肌。

いやいやいやー！！まてまてまて！！

転生し続けているとしてもオレの髪は、今回も黒くはなかったはず。

そうだ。しかもいまオレは、うずまきナルト。

髪の色は？

黄色に近い金。前髪だけ赤色のメッシュ。

目だって父ちゃんそっくりの青色のはずで・・・

年は49歳のはずで。

なのになぜ自分と思われる姿と鏡の中の自分ツが違う！？

しかも

しかも！！



「いくつまで逆行してるのよオレえ！！！」

オレさオレさ。火影の仕事に疲れて執務室につっぱして昼寝してただけだよな？  
なのになぜだ！？

なぜオレが

こんな　こんな・・・

「なんで天下のオレ様火影様なオレが【大蛇丸　になってるんだよ  
おっ！！！！！」

ありえねーよ、おいしい！！！！

「なんでだよ！！てかなんだってばよこのミニマムサイズはー！！  
！！！！！」

うちの世界では“おーちゃん”。

里でも以外と、外見や言動とは裏腹に世話焼きとして有名だった三忍。

でも、やっぱり（ちよっとだけど）変態。

その名も大蛇丸。

気が付けばオレは、大蛇丸になっていた。  
しかも原作開始時より若干若いです。

黒髪にあう？

エヘ

って

ちがうだろうオレえ！！！！

## 02 ありえないことばかり

それは【原作】より数十年前も前のこと

その忍の世界は、まだ始まったばかりの戦に吞まれていた

そんな時代の 後の伝説の三忍がひとり大蛇丸は 怪しく笑った

嘘はよそう

真実をあなたにお伝えしますと

三代目火影、猿飛ヒルゼンに、“彼”はわらう

\*\*\*\*\*

目が覚めたら大蛇丸になっていたアザナことうずまきナルト。  
成り代わりはともかく。

大蛇丸とか有り得ないんですけど！？

大蛇丸といえ、NARUTO世界における四大敵役といっても過言ではないはず。

まあオレがナルトだった並行世界における大蛇丸は、里のヒーローでいい奴だから別だ。

それより、なんでこんなことになったか分からない。  
しかも大蛇丸。

始めにいた部屋には長居しなくて、プチパニックになりつつとにかく部屋をでて、勝手に家捜しし、そこでベッドをみつけ布団に潜りこんだ。

それからなぜこんなことになったと、丸二日飲まず食わずにも関わらず散々考えたけど、寝たからと言って夢落ちになるわけでもなく、日がたつに連れ逆になんか落ち着いてくる。

3日目に鏡をしっかりとみて、色々試して、そこに映っているのが自分だとうやくあきらめもついた。  
つと、いうより暫くまた騒いでた。

だけどそれにより突然ぶつつんきて、自分のなかで急激に醒めた。

とりあえず自分の状況を把握しようと、二日間引きこもりっぱなしだった部屋をでた。

まずは家捜しから。

家というより館だろう。

その広い敷地内をあらかためぐり、地下に異臭のする研究室らしき場所を発見し、そういえばオレが目覚めたのはここだったと眉をかめる。

普通 of 精神なら直視は耐え難い環境。

まだ若さのあつた鏡のなかの大蛇丸の姿を思い出し、三代目はまだ大蛇丸の悪行には確信にいたつていないだろうと思ひ至る。もしかするとまだ気付いてさえいない可能性もある。

そういえば原作で、大蛇丸が変わつたのは二十歳頃で、両親の死が原因だとかいつていたようなないような・・・。

まあ、そのへんは本人に聞いたわけでもないし、ましてやあいまいなオレの原作知識からはなんともいえない。

だからって　そこでなぜカマ街道を選んだのかは意味不明だしわかりたくもない。

やはり中途半端にしか記憶がないから、元に戻れたら大蛇丸おーちゃんにじかに聞こう。

「にしても換気扇ぐらいつけろよなあ」

まあ、忍がそれじゃあだめなんだろうけど。血のにおいかぎつけられちゃったら意味がないしね。

オレは資料が散らかり、腐臭漂わす部屋を見回し溜め息ひとつ。オレ、医療忍者なんだけど。

確かにバイトで姿を変えて、“アザナ”と名乗って、暗部系列の開発部にいたことはあるよ。

そこでは拷問系チームと仲良くなったりしたさ。人体実験もしたさ（微妙にだけどね）。

それに死んだ患者も数多くみてきたから、死体は見慣れてはいる。だけど生かす立場のオレに、この状態は言葉がなくなるほどビツクリだ。

やれやれ今オレが大蛇丸なんだぞ。

この現状を見られて、三代目に疑われたらどうしてくれるんだ？里抜けしなくちゃいけないじゃないか。

とつさに49年間の相棒である九尾キューちゃんに助けを求めようとして、魂の半分たるあいつが傍にいないことを思い出し、しかたなく“人間が使える忍術”の印を組む。いままでは自分のチャクラが少くて、九尾やら他人からチャクラを補給してもらわないと使えなかった忍術。それも肉体が大蛇丸である今は、できなかったことも、普通の忍以上に簡単にできる。それほどのチャクラがこの身にはあった。

「燃え尽きる」

オレが印を組み終わると、とたん死体や実験器具などに黒い炎が上がり、一気に燃えていくがそこに熱はない。

燃えカスも、灰も、こげ後もおいも・・・なんにも残さない黒い炎。オレがナルト時代に開発した新術だ。

見本は、イタチにみせてもらったアマテラスだ。

因みに資料は全て目を通した後、同じように消した。

もし本当の大蛇丸が帰ってきたら？

そんな心配は資料を読んでありえないことだとわかっていた。なので遠慮せずすべてを燃やす。

たとえ本人の魂がこの肉体に戻ってきてオレが追い出されようと気にもならないし、だいいち本人が帰ってくることは『有り得ない』のだ。

オレが燃やした資料にそのことがかかれていた。

そもそもオレが、“こう”なった原因は、この世界の大蛇丸が原

因だった。

大蛇丸は、転生術やら永遠の命をもとめて、その研究にいそしんでいた。

その原因は、やはり彼の両親の死。  
そうして実験を繰り返していくにつれ、ついに今回の実験に到達した。

それは魂の召喚のようなもの。

しかし失敗に終わる。

そこで転生やトリップと相性のいいオレの魂が、彼の失敗した術に巻き込まれコチラに飛ばされ、本人は死亡し、オレがここにいるという図式が成り立ってしまったらしいのだ。

もし大蛇丸とオレが完全に入れ替わって、向こうのナルトであるオレの中に大蛇丸がいたら泣くけどね。

でもそれはたぶん不可能だ。

だって“オレの魂の半分”は、まだ“向こう側”で生きているってわかる。

なにせオレ、九尾と魂融合しちゃってますから。

成り代わって、生まれて49年。

長いその年月の間いろいろあった。

チャクラ供給源として母・うずまきクシナから九尾を自分の身体に取り込み、オレが新しい封印式をつくって自分の中に封じなおしたり、そんなこんなで九尾と一緒にいたせいでオレたちはいつのまにか魂が融合していたのだ。

だからわかる。

ぶちやけ今の大蛇丸に憑依しているこの状況は、魂が半分しかない状況なわけだ。

ってことは、向こうのオレの身体の中にはまだ九尾がいるわけで、向こうにいけたとしても大蛇丸ごとき人間の小さな魂が九尾の魂にかなうわけもなく、はじかれるか消されてしまうわけだ。

オレは……そうだな。

たぶんこの世界で死ぬかなにかすれば“オレは”元の世界に戻るはず。

ただし、オレは。で、あつて、魂だけ行方不明の大蛇丸のことはわからない。

まあ、オレなんかは、向こう側に自分よりばかりでかい魂の半分がいるから、引力で引き戻されると思うんだけど、今は肉体っていう器が邪魔でもどれないんだよね。これがさ。

それにうずまきの血が濃く封印術にたけ、さらには九尾の力を我が物としていたオレと、伝説の三忍になる前のたかだか大蛇丸じゃあね。

さすがにチャクラの量も経験も質も、なにもかもが違うわけよ。うん。ずばりおう。

この世界の大蛇丸は、オレが消えても戻ってこない。

オレは死んだらもとの世界に戻るけど。

それが尾獣と混ざった人柱力と、人間の差。

ありえないですね。はい。

そんなわけで、大蛇丸になったアザナなうずまきナルトです。

「あ、やべ。壁と家具まで燃やしちゃった」

ぼろっつとしていたら、うっかり壁まで燃え尽きた。  
がら．．．

「あ．．．」



黒炎で消失した場所から、壁が一部崩れた。

そこからきれつがはいり、徐々にそれはひろがっていく。

そのままパキンとおとがして、巨大な天井の欠片が降ってきた。

そこでなにか嫌な予感がし・・・

がらがらがらっ！！！！！！

ドッゴン！！

大きな音を立てて、支柱を失った家が倒壊した。

地下だったせいで、“余分なもの”まで消してしまったようだ。  
だめじゃんオレ。

大蛇丸に成り代わって三日目。

寝てただけで怠惰にすごしたたった三日のその家は、どんどんそこからヒビが入っていく。

必死こいてふってくる瓦礫を長年の経験と感だけで避けつつ、地上に向かった。

「ぎゃあ~~~~~！！！！！！」

派手な倒壊音がして、瓦礫から這い出てきたオレがみたのは、しめった感じの暗い森。

さっきまで建っていた見事なほど陰湿な日本家屋は見えない。

それに呆然とするオレを笑うように、鳥がけたけたと笑った。

「なにがあつたんだい大蛇丸!？」

「いまの音はなんじゃ!？」

誇りまみれで呆然とたたずむオレの前に、シュタツと若い少年と少女が降り立つ。

大蛇丸と同じチームの若き綱手と自来也だった。

やがて土煙が晴れ、二人も状況に気付き、あまりの惨事に呆氣に取られていた。

「な。なによあれ!？」

ようやく我に返った綱手が、家のあつた場所を指して悲鳴を上げる。  
家のあつた場所には家だつたろう瓦礫。  
そして

「花・・・かな？」

「しっかりしな大蛇丸!そんなものみりゃあーわかるのよ!！」

「おぬし・・・なにをしたんじゃ？」

「え。なにつて室内で焚き火を」

「それでなんで花が咲く!？」

「・・・焚き火した自分が言うのもなんだけど、花より室内で焚き火をする危険性を問うべきじゃないか？」

「家を壊すだけの花が突然育つ方が大事件よ/じゃ!！」

なんか愉快なまでに悪質な黒と赤色のまだら模様の巨大な食虫植物が咲いていた。

しかもあれ、口がある。

キバがギラギラしていて、シャーとか言っている。

やべえ。なんか家全体が蔭で覆われて、さっきよりもさらにやばいことになってる。

あれ？

なんで花？

だって支柱を壊したから家が崩壊したならわかるよ。  
けどなんで、花？

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドオオ・・・

「いやあーーーー！！！！！！おいかけてくるう！！！」

「なんじゃあ！なんじゃなんじゃあっ！！わしなんかをくつてもう  
まくないつてのお！！！」

「火遁がくわれたあだとお！？あああああああああああ  
ーーーー！！！」

バク！バク！バク！      バクツ！！

「「「ぎゃあああああああああ・・・！！！！！！！！！！！」」」

「」

その後、必死で逃げた。  
綱手と自来也とオレで。

だってあの花は、オレたちを標的にするや否や、忍も真っ青なスピ  
ードでおいかけてきた。

どうすごいかって、蔦を伸ばすなんてどっかの触手系妖怪のように  
伸ばしたりして襲うなんてことはせず、根っこを地面からおこし、  
その根を足のように動かして【走って】追いかけてきたのだ。

しかもなぜか火遁が利かない。

あとあと森の中を騒音を立てて追われていたオレたちは、なかなか  
集合時間にやってこないオレたちを心配した猿飛ヒルゼンにより事  
件は幕を閉じる。

後にわかったことだが、あの花ははじめから大蛇丸の研究室にあ  
ったらしい。

もともとは任務の最中に大蛇丸が見つけた突然変異種で、たまに綱  
手とかもその花の様子を見に来ていたらしい。

もしかすると医療か何かに使えるかもしれないということで、三代  
目公認で研究されていた花の一種なのとか。

その特性は、チャクラを吸収して大きくなるというもの。

しかしいままではどれだけあたえても花は、五センチ以上背丈が伸  
びることもなく、本当に小さなパンジーのような可憐な赤い花を咲  
かす程度だったとか。

それには口はないそうだ。

つで、気付かなかったオレも悪いが、つまるところ　オレの黒炎をあび、その炎を浴びたことで黒いチャクラご吸収。

チャクラコントロールだけはダレよりもうまいオレが、この身体にありあまるチャクラを有意義に活用したところ、黒炎は予想を上回るほどチャクラが濃縮されていたようだ。

そのため要領をはるかにオーバーするチャクラを一気に吸ってしまったそれは、ひそかに家の床や壁に根を張り、オレが支柱を燃やしている間に見えない場所で成長を続け

「家が崩壊したと」

「急成長で変異が起きたようじゃのう。大蛇丸。おぬしどれだけのチャクラをあたえたんじゃ？」

「ざつとうちは一族秘伝の車輪眼による秘術【アマテラス】を二倍掛け合わせたレベルですかね」

「ぶっー!!」

「うわ。きたいですよセンサー」

報告を兼ねて火影邸にいったとき、たずねられたことに、さらつと答えたら、茶を飲んでいた猿飛ヒルゼンが勢い欲ソレを噴出した。とっさによけたけど、猿飛ヒルゼンはむせたまま。

ナルトだったときの計算とはずれたチャクラ量にびびりあわてて計算しなおしたから間違いないんだけど、なにをそんなに驚く必要があるのだろう？

事実なのに。

とりあえず。トリップ三日目ではやくも家をなくしたオレ。

チャクラコントロールが得意といっても、以前のナルトだった自分にはチャクラがなかったので、自分の身体に必要以上にチャクラが溢れていることにならない。

うゝん。

もう一度、一から修行しなおそうかな。

オレがひとり考え事にふけていると、なにか言っていたらしい三代目がきれた。

「いい加減にひとのはなしをきかんかい!!」

まあ、こんな生活も・・・わるくない。のかな？

や。いまの時代が戦時中でなければね。

ついでにオレが大蛇丸だって事実がなければもったいいのに。

いつ ばらそう。

オレが大蛇丸じゃないって。

どうしたら信じてくれる？

どうしたら話を聞いてくれるだろうか。

怒り心頭顔まっかかな三代目をチラリと一瞥し

オレは自然と口端が持ち上がるのに気付いた。

そのままわらう。

くつくつく。たまにはあなたがオレに余興をくれればいい。

なあゝに、はじめからこんな話、信じるものがあるはずないじゃないか。

なら信じて【もらう】必要はない。

信じ【させる】だけだ。

どうなるかは、あとのおたのしみ

さあ、いま 告げよう

「嘘はよしでしょう。真実をあなたにお伝えします」

おれは笑う。

あなたは・・・

ああ、顔の色が優れないようですね。

大丈夫ですか？



## 02 ありえないことばかり（後書き）

文章が読みづらくてすみません。

国語や文法苦手ですみません or z

## 設定

【クロフデ アザナ】

<容姿>

- ・享年24歳
- ・赤い髪
- ・明るい黄緑の瞳

<その他>

- ・ナルトの前世
- ・幽霊やオーラが見える
- ・なにかを作ったりするのが好き
- ・記憶力はあまりよくない
- ・気配には敏感

## 【うずまき ナルト】

### <容姿>

- ・ 49歳
- ・ 金髪、前髪だけ赤いメッシュ
- ・ 青色の目

### <特徴>

- ・ 『うずまき』の血が濃い
- ・ 六代目火影
- ・ 医療忍者

- ・ 前世の記憶がある

- ・ 色んな世界を巡っているらしい
- ・ 原作知識有り
- ・ 前世で幽霊が見えた影響からか、チャクラの【流れ】を肉眼で見えたり感じ取ることができる

### <趣味、好き>

- ・ 趣味は忍術開発
- ・ すきなものは、もふもふフワフワした手触りの良いもの
- ・ 平穏
- ・ 癒されるものならなんでも

### <嫌い>

- ・ 甘いもの

- ・ 難しく物事を考えること
- ・ 目立つこと

#### < チャクラ関係 >

- ・ 見えるから、チャクラコントロールは拔群
- ・ 封印術は『うずまき』の血の影響でしつかり習得済み
- ・ チャクラコントロールができるから医療忍術が得意
- ・ イメージ力（記憶力）がなく、幻術や変化が苦手（記憶力が悪い  
ため、自分が一度なったものでないと変化できない）
- ・ 幻術を見破ったり解くのは得意だが、自分でかけるのは苦手
- ・ 空間忍術はできるが、たぶん暴走する

#### < 九尾との関係 >

- ・ 九尾とは仲良し
- ・ 長い年月を共に過ごしたら、魂が融合してしまった
- ・ チャクラがないので、いつも九尾からチャクラを借りている

#### < 転生による影響 >

- ・ なにをしてもチャクラが増えない

#### < 原作との相違 >

- ・ 九尾事件なし
- ・ 両親健在
- ・ うちは一族健在
- ・ サスケはマブダチ
- ・ 曉は義賊集団として有名

・波風ミナトは極度の過保護

・大蛇丸とダンソウは過保護すぎて暴走するミナトのストッパー

・三代目は隠居して、家族と仲良く暮らしている（たまにミナトの尻拭いに借り出される）

・アスマ？ナガト？自来也？普通に生きてるよ

<備考>

・表では医療忍者のスペシャリストとして有名

・家族以外、誰にも言っていないが、“アザナ”と名乗って“アザナ”の姿で、開発に籍をおいている

・開発部にいるのは、趣味が発展して、新忍術を作りすぎてしまったため

【大蛇丸（innナルト）】

<容姿>

・サラサラの黒髪

・黒い目

・美形

・誰かの皮をかぶったりすることはない

<備考>

- ・チャクラが普通の人より多い
- ・医療忍術にたけている
- ・三代目だけに【本当の大蛇丸】は死に、入れ替わったことを話してある
- ・赤髪のアザナとして、医療忍術やら開発に携わっている
- ・ある事件をきっかけに感情の高ぶりで姿が変わってしまう
- ・平穏を望むが・・・

### 03 蛇はなにを思っただきだす

すべてにはきつかけとなりうる事柄があるという。

たとえばある純粹無垢な美形の少年が両親の墓前で、白蛇の抜け殻をみつ、ひとつのきつかけを得たりする。

そのまま大人になった元美少年は、不老不死を望み、それゆえに仲間の中で最も早くにこの世を去った。

不老不死を求めた【元】美少年は、“死”にソレを求める理由を尋ねられたとき、その理由としてこう答えた。

「ありとあらゆる術をそして真理を手に入れるためには長い長い時間が必要でね」と。

その真理を知る者はない。

けれどそこにあつたのは、なぐさめとして投げかけられたはずの“言葉”。

言葉は眼に見えぬしがらみとなりえる、この世で最も重い呪詛。

墓前。蛇の抜け殻。

そしてたたずむ少年。

当時、猿飛ヒルゼンはその子供に告げた。

それは両親の死を悲しむ子供への慰めの軽い言葉。

「お前の両親もどこかで生まれ変わっているのかもしれないのオ

いつかまた大きくなったお前と会うために・・・」

しかしそれは大きく少年の心に響き、重さをともしなう楔となる。そして少年の運命はその日より変わる。

不老不死を求めるは、亡き父母と再び出会ったため

『それっていつだろ』

『さあてな それはいつだかわからんが・・・』

「そうして【元】美少年な純粋な少年は、悪い大人の甘い言葉にだまされ“永遠”を求め始めました。

さぞや少年は両親の死が寂しかったのでしょう。

再び出会うために追いかけ始めた不老不死の秘術。しかし少年はやがて“それ”に取り付かれるようにのめりこんでいくのでした」

三代目火影、猿飛ヒルゼンが呆然とする目前、執務室のテーブルの上に腰掛けるのは、明るい黄緑の瞳に赤い髪青年。

なにかの物語を朗読するように語ると、「この話になにか心当たりは？」と面倒くさそうに肩をすくめてあくびを一つした。

そのやる気のなさそうな視線は、ゆるい態度とは裏腹に、そのまま口を半開きの状態であっけにとられているヒルゼンをまっすぐと捕



らえている。

「まさか、あの言葉がおぬしを・・・」

「え。あー・・・どうだろ？」

「は？」

ヒルゼンの言葉に、赤毛の青年はキョトンと不思議そうな顔をした後、困ったように自分が今言ったばかりの言葉を否定するような発言をする。

コロコロと表情をかえ、無邪気に笑う相手に、ヒルゼンがさらに間の抜けた顔をする。

一体なにが言いたいんだと、ヒルゼンの呆然とした顔からありありとその感情がうかがえ、赤毛の青年は苦笑を返す。

「実際のところ、そういう回想シーンをチラッとみたことがあるだけで、オレ自身は大蛇丸じゃないから気持ちとかよくわかんないんだわ。

ただ、間違いなくそれが原因で、あんたの大蛇丸が変人街道に走って、あげく『オレ』が召喚されたんだけどさ」

「・・・おぬしのお話を信じると？」

「ん？信じなくてもいいけど・・・」

そこで青年は言葉を区切り

「信じないなら信じるまで現実を見せてあげるよ。

あ、オレ幻術って苦手だから失敗しちゃったらごめんねえ」三代目

」

「・・・・・・・・」

ニツコリと笑って、さっそく彼が作ったという忍術の印をくみはじめた青年の行動に、「ひいー！！」とかすかに悲鳴を上げたヒルゼンの顔から血の気が引いていく。

花が彼の家を崩壊させたとき、騒ぐ二人の間を眠らせた青年はヒルゼンに幻術をかけた。

そのときみせられたのは恐怖。

「わ、わかった。わかったから『六代目』！！たのむからやめてくれ！」

『六代目』と呼ばれた赤毛の青年は、慌てるヒルゼンをみてつまらなそうに印を組んでいた手を下ろした。

「いやだなあゝ三代目。もちろん冗談ですよ」

「いやいやいやいや！！いまのおぬしの目はマジじゃったぞ！！」

「つと、いうわけで。【オレが大蛇丸の不老不死実験に巻き込まれてこつちの世界にやってきて、大蛇丸になりかわっちゃった未来の六代目火影】だというのは理解してもらえましたね。理解したうえで相談なんです」

「人の話をきけい！！どこまで強引なんじゃおぬしは！！」

「いや。だっていろいろと“大蛇丸”になりかわりとか、この先の未来には不服満載&不都合しかないのです。

ならとつとオレが“大蛇丸”に成り代わったことを認めさせ、オレは自由に生きるに限る。

あとはこれから大蛇丸として生きていかなくはいけないオレの身の安全をと思ひまして、“大蛇丸”がやってきた悪事が、“オレ”がやったことではないと証明したく。

それとたぶんその原因（三代目のありがたいお言葉の）について追

求し、とつと話を進めたかったというわけです。なにか問題でも  
？」

青年はなんでもないといわんばかりに、ほがらかにアッハッハと笑  
った。

## 04 アザナとナルトと大蛇丸

はい、どーも。成り代わり主のクロフデアザナこと、六代目火影うずまきナルトです。

っと、いうか現在進行形で大蛇丸な自分です。

ややこしいな。

実はチャクラを吸収して巨大化した花のせいで、大蛇丸の家がなくなってしまったため、一時だけ三代目の元で暮らすことになったのです。

そこで説教をされていたのですが、途中で形勢逆転。

オレが不慣れな幻術も使って、さらには火影としてつちかった話術をも総動員し口を動かして、三代目にすべて話しました。

戦争とか火影とか里とか忙しいのはわかるけど、だからといって大蛇丸の所業を見て見ぬ振りしていたのは、ソレは優しさではなく、甘さです とね。

だからオレは喚ばれたんだからな。

さらにいうと、潔く、オレの話をきき、きちんと『理解したうえ』で協力してくるといった三代目はいい判断をしたと思う。

オレの言葉を即そのまま鵜呑みにするようなら、ひととして表面上しかみていない証。

即、オレはこの里を切り捨てただろう。

逆に証拠を見せても信じないなら、面倒になつてきたオレが里をのつとつた。

まあ、それはさておき　話し合いについてだ。

そこは聞く耳持たない奴と、護衛と称してこそそこそしているお面集団などは、うつつとしいだけだったので、すべて眠らせ記憶を消してそこらに放置した。そうして三代目とオレの二人きりになった部屋には、周囲には強固な防音効果つきの結界を張つて“逃げられない”ようにした。

ええ。きつちりと、かたあ、つけさせてもらいましたよ。  
これのどこが話し合いだ。脅しだろ？　いや違う違う。  
ちゃんとした『話し合い』だよこれはね。

もちろんオレが成り代わったことも、成り代わる前までの大蛇丸の所業も何もかも。

それを脅しとってしまったら終わりだよ。

だって、大蛇丸なんて原作じゃ「悪」だ。

その原因を作ったのは三代目なので、少し反省してもらっただけ。  
そしてオレは自分の居場所と、“オレ”っていう『クロフデ アザナ』もとい【オレが大蛇丸の不老不死実験に巻き込まれてこっちの世界にやってきて、大蛇丸になりかわっちゃった未来の六代目火影】の身の保証をゲットした。

いままでなにか間違はなくしてくれちゃっているであろう存在自体が怪しすぎる大蛇丸に成り代わったんだぞ。そんな大蛇丸の性格が突然変わったら、不信がられるのは明白。“裏側の人ら”や上層部

とかにあやしまれるにきまっている。そうなったら、オレはどうなる？

今、この世界で“大蛇丸”といえば、オレだ。

そんなかわいそうな立場に陥った自分の身を守るためだ。

火影（＝里長）からの保証はやはり必要だった。

そこでオレは、大蛇丸としても暮らすが、そんな誰かの身代わりのような生活は窮屈だと『クロフデ アザナ』の姿で出歩くことを許可してもらったのだ。

もともとオレはナルトと暮らしているときも、趣味で始めた開発の仕事にいくさいに前世の姿に変化して、前世の『クロフデ アザナ』という名を偽名にしていた。

『クロフデ アザナ』は赤い髪に、緑の目をした男だ。

そんないままでみたことがなかった男が突然里内をうろついていたら、さすがにいい感じはしないだろう。

ましてや里長の信頼も厚い 未来の“火影”であることを告げているためと、弟子の大蛇丸であることにかわりがないから と、なればよけいに。

なんで『ナルト』の姿にならなかったかというと、時間軸的にこのまま生きていれば父である波風ミナトが生まれてしまい、必然的に容姿が似ているおれ達は関連付けられてしまう。

それにこの時代で『ナルト』の名を出すことはためらわれた。

未来を大きく変えてしまったら、オレ・・・否、“ナルト”が生まれなくなってしまうそうだったから。

だから『うずまきナルト』の名は絶対名乗らず、【未来の六代目火影】とだけ告げた。

赤毛の姿も『アザナ』という名も変化で偽名だと先に告げてあるほど。

結果、了承は得たが、交換条件として、今の時代、極端にすくない医療忍者の育成と忍術始動を義務付けられた。

かわりにオレは、元暗部だったためいままで里で見かけなかった。しかし暗部を続けていられなくなったため表に出てきたという設定を火影じきじきに頂き、『アザナ』として堂々と里を闊歩できるようになった。

## 05 オレ流の話し合いの方式（前書き）

前のページで主人公が三代目とした話し合いの内容について



## 05 オレ流の話し合いの方式

話し合いの状況

わかってるよ

だからちゃんと語ろう

さあ、準備はいいよね？

語り合おう

オレと“お話”しようか

〈これぞオレ流の『話し合い』〉

ここはオレの知らない世界。

原作とも違う。

今、オレが大蛇丸であるため、本当の大蛇丸が死んでしまったズレタセカイ。

平行世界      その言葉だけがすべて。

オレがナルトだった世界とはやはり何かがずれている世界。

オレの里は、四代目夫婦は健在で、三代目も幸せに老衰で死に、暁は義賊集団。

大蛇丸やサスケは、里のヒーロー。

そしてこの世界。

どれもかしこも原作とは違う世界。

それはオレが“ここ”にいるからかもしれない。

どちらにせよ。オレのなかには【NARUTO】という二つの世界の記憶と知識がある。

その中で原作では語られない数々の裏話が、こうして実験をする  
と悪いところも含めて目についてしまう。

たとえば猿飛ヒルゼン。

彼は甘い。

火影をしていたオレじゃなくても、そう思うだろう。ひととしてはできたひとなのだろうが、できすぎて聖職者のようだと思う時がある。

オレはそれを偽善。いや、砂糖菓子のようなと思う。

甘さは時に人をだめにする。この世界のヒルゼンはそれが強い。

オレの知る世界の三代目は物凄い苦勞をしていて、それがすべて目に見える形で動いていたし、叱るべきところはきちんとしていたから、オレの世界の大蛇丸は里に残っていたわけだ。

だって、まがりなりにも猿飛ヒルゼンは、三代目火影であり、同時に大蛇丸の師でもあるんだ。

火影なら、里人でもある大蛇丸にしっかり言葉を与え、だめなときはだめと叱ってやるべきだった。

里を思うなら、里の害になりえる者には疑いを持ち、ソレ相応の対応を見せるべきだった。

同時に猿飛ヒルゼンは、最も大蛇丸の近くにいた大人だ。だからこそ彼の心情の変化に気付いてやるべきだったんだ。

それがこの世界では、ないように思う。

原作どおりの会話を二人がしていたのは確認済みだ。

もし大蛇丸の奇行を見て見ぬふりをしていたり、同情なんて悲観が混ざって放置していたのだとしたら、それは優しさではなく自己満足だと思う。

オレがそんな甘ったるさにつかってしまえば、いろんなみで性格や思考が捻じ曲がりそうだ。

「誰かがきつとあやつを変えてくれる」「自分には無理」なんて客観的希望的発言は、少しも努力をしていない人間が言っただけじゃない。ダメもとでも、何度でも、それこそ原作のナルトのように体当たりで挑み続けるべきだった。

ましてやこんな無情な忍の世界だ。

それこそ誰かがどこかで止めなければ、悪意や憎しみは止まるべきを知らずあふれ出すだけだ。

大蛇丸という存在に対して、なにもやってもいない三代目。

三代目がすべきだったのは謝罪ではない。  
その『後』だ。

『後』に何かをする。手を差し出したまま放り投げるだけじゃなく、そのあともしっかりと導き、行動に出すべきだった。

だから、それが甘いと思う。

そうして大蛇丸は、永遠という存在に、研究に、とりつかれた。

「まっ、いまさら何を言っても遅いけどな。だって本物の大蛇丸はすでに死んでいる」

「ろ、六代目……」

「っと、いうわけで。オレの身の保証はよろしく三代目！  
できないなんていわせないよ」。

だって実質的にオレをここによんだあの実験のせいで大蛇丸は死んじゃったわけだし。そんな危険な実験をさせた原因って三代目の甘さからだしね。

ねっ。ここでオレの身柄を自由にしないと」

語るだけかたって、ニツコリ笑う。

にっころと印を

「ま、まてまて！わかった！わかったから！！その印を結ぶのをやめてくれ！！」

慌てて、血相を変えてブンブンと首を縦に振りつつオレの次の言葉をさえぎる声。

そうしてオレの話し合いは幕を閉じる。

勝ち取ったのは身の保証と、身分と戸籍など。

オレは大蛇丸として以外にも、アザナとしてこの葉の額宛を授けられた。

そして大きな三代目火影の安堵のため息と共に、だされた条件に、少し考えたあとに承諾した。

オレの身の安全の保証と、大蛇丸じゃないのでオレはオレらしく生きる権限をもらった。

あと立場だね。

これは、大蛇丸みたいに殺しなんかしないよ。人殺し？いやだね。面倒だよ。

なのでナルト時代からやっていた医療忍術に貢献することにしました。

ちょうどこの時代ではまだ医療忍術の確率化が難しいときだったようだね。

契約成立だ。

うん。いい話しをしたね。



## 06 同い年の師弟

さて。オレは今、赤毛のショートカットに明るい黄緑の目をした二十歳ぐらいの姿で、『アザナ』と名乗って医療忍者として活躍している。

立場は上忍。

今まで姿を見せなかったのは暗部で働いていたという裏設定つきだ。これはオレがオレとして自由に動くために、三代目と交わした条約のひとつ。

身分の保証。

かわりに、オレは持てる限りの知識でもって里に貢献する。これが三代目との約束だった。

三代目の許可も何もなく暴れることも、さっさと里抜けすることも本当はできた。

それをしなかったのは、ひとえにこの身にチャクラがあつたからだ。ナルト時代ではチャクラがなくてひとりではできなかった技も、この大蛇丸の身体ではできたりする。

ならば追っ手をかけられたり隠れて生きるよりも普通に表で生きたい。

そう考えて、あまんじて三代目との条件を呑んだのだ。

三代目火影、猿飛ヒルゼンにすべてをばらした　　なかなか人の話を信じないわ、すぐにありないと茶々を入れるわ、不審者扱いするわ、まったく融通が利かなかったが、そのぶん時間をかけて“説得”を試みた結果、泣きながら喜んでいろいろ承諾してくれた

あの日から、オレは『大蛇丸』として表の任務がないときは、“アザナ”と名乗って、ナルトになる以前の姿で、医療班に参加し

ている。

なぜナルトより以前の前世の姿なのかというと、“うずまきナルト”の姿ではこれから生まれる「ナルト」や瓜二つである父・波風ミナトとすぐに関連づかれ、未来が変わってしまう危険があったからだ。

今では、このアザナの姿もようやく里人に覚えてもらえる世になり、警戒されなくなってきた。

たぶん木の葉の額宛の効果と、三代目とオレがよく話している姿を目撃されるようになったからだろう。

これで、大蛇丸としてではなく、一個人として平然と里の中を普通に闊歩できるようになったわけだ。

ただし。表立っては医療忍者としてしか認知されていないので、少し面白くないのも事実だ。

なぜナルト時代のように開発ではなく、医療班にのみに顔をだしているかといえば、残念ながら、大蛇丸に成り代わってからはまったくチャクラの“流れ”がみえなくなってしまったのだ。

原因はこの身体が、オレの本当の肉体じゃないから、魂と肉体の波長がいまいち合わないためだ。

そのため新術開発が趣味だったけど、今はソレができない。

チャクラが術として練られる気配はなんとなく感じるものの、術式が見えないのではどうしようもない。

しかたないので、相変わらずのチャクラコントロールと膨大な医療知識を駆使して、医療忍術を里に根付かせようと活動している。

その活動の一環として、最近では、三代目から預かった粹のいい若人の育成も行っている。



「師匠、師匠!!」

「んあ？」

「つて、きけやこらあ!!」

うとうととしていたら、肩を強く揺さぶられそれ、でも眠さに負けて開けた目を閉じようとした。

瞬間ものすごい高密度のチャクラが集まる気配を感じ、やれやれとチャクラ自体を封じてからゆっくりと目をひらく。

あぶないあぶない。

気配に敏感でなければ、今頃オレはとある怪力少女の魔拳によって、クレーターの一部となっていただろう。

チャクラで強化した瞬発芸でもって、地面と仲良しはカンベンして欲しい。

「なっ！チャクラ封じ！？こんなこと白眼あたりがないとできるはずは・・・」

「“できない”なんて思い込みだ。現にオレはできているだろ」

先程の続きで眠気がいまだ残っているためふぁくとあくびが一つこぼれでる。

傍の水道で顔を洗えば、鏡に映るのは赤い髪に黄緑の目をした20

歳後半ぐらいの青年。

首元に木の葉の額あてをひっかけるようにかけ、なんだか額あてがないとまったく忍びらしからぬだらけた着物姿の男は、オレの前世“アザナ”の姿。

ナルト時代、火影としてではなく開発部に行くときなどはこの姿でいたが、今回もまた平常時はナルトや大蛇丸の姿では動きにくいので、前世のオレの姿に変化したものだ。

寝ても変化の術がとけないなんて、さすがオレとか自画自賛しつつ、鏡越しにオレを険しい顔でにらんでくる美少女にため息をつく。

茶に近い淡い金髪に、ちよつと鋭い釣り目。

胸は・・・まだ、それほどかくはない美少女は、オレが“アザナ”として今一番力を入れている弟子だ。

と、いつても後々医療忍者に向いていそうな奴をみつけしだい弟子は増やしていく予定だが、いまのところ弟子は彼女しかない。

そんな彼女の名は綱手。

ナルト時代、オレが「ばあちゃん」と慕っていた存在であり、五代目火影そのひとだ。

綱手、大蛇丸、自来也の三人は、ヒルゼンの弟子ではないのかと思うだろうが、なにぶんこの時期すでに火影の地位についている彼が、漫画の力カシ先生やヤマト隊長のようにベッタリ部下にくつついていられるわけがない。

なにより大蛇丸はいない。ここにいるのは彼に成り代わった自分。

それに自分は三忍顔負けの忍術を会得済みときている。

そのこともあって現在、自来也は別の師をつけ、綱手にはいまのうちから医療忍者として磨きをかけてもらうことになった。

本来ここにいるはずの大蛇丸だが、中身がオレのため、元未来の火影でもあるオレには修行も師も必要ないので、綱手と自来也には大蛇丸は別のカリキュラムをうけていると告げて事なきを得ている。

これにより大蛇丸がいま姿を見せずとも誰も違和感を持たないため、

オレは“アザナ”としてのみに集中できる。

そんなわけで、オレは綱手に医療忍術を叩き込む師に抜擢された。

ちなみに自来也に関しては、三代目と相談したところ、基礎などで落ち着くの見計らい、とっと仙人修行にいかせることになっている。

伝説の三忍（-1）早期育成計画発動中だ。

いやゝ。でもよくよく考えると、今のオレと綱手って同い年なんだよな。

なにせ体は大蛇丸のものだ。

たしか綱手と大蛇丸は同世代のはず。

師として彼女に医療を叩き込んでいるものの、変化の術を解けば肉体は大蛇丸なオレ。

オレが大蛇丸であると知る者からしたら、なんだか変な師弟関係だろう。

しかも綱手は大蛇丸の同期でありスリーマンセルのチームメンバーだ。

そんな綱手が、実は師匠が“大蛇丸”であると知ったら、いったいどんな顔をするか。

見物だろうな。

みてみたい。

まあ、こちらら、精神年齢だけは上だ。オレの素性を教える気も、うっかりと口を滑らすようなポ力などする気もないが。

「あの、アザナ師匠。いまの術封じはわたしでもできますか？」  
「・・・あ、ああ。」

あ、いや。いまのは無理だな。あれは長年の経験から術の発動を感じ取り、なおかつオレオリジナルの忍術だからな。できたとしてもお前にはまだ早い」

それにしても・・・。

同い年というのもなんだが、それ以前にオレからしてみれば綱手が若いことじたいが違和感を覚えてしょうがない。

だって、あの「ばあちゃん」だよ。

綱手は、オレの世界では常にナルトの祖母のような位置にいてそれを許してくれて、いつも優しくオレを見守って九手いたような人で、なおかつオレの前の火影だった尊敬に相對する人だったのだ。若干とはいえ、尊敬をしていたその人が、硬い表情でオレをみている。

しかも術を教えているときは真剣な眼差しだが、表情も態度もどこか硬いまま、オレがぼかをするとう散臭いものを見るような下げずむような目がむけられる。

つまるところ、オレはまだまだ彼女に警戒されているのだ。

暗部くだりと言われても、いままで里で一回も見たことがないオレを疑っているのだ。

それは忍としては正しい。

同時に、いままで立派な火影という人に師事していた分、そんなう散臭い奴を師と仰ぐのに抵抗があるようなのだ。

せっかく“火影様”じきじきに教わっていたのに、なんでこんな得体の知れない奴（かなり格下げしている）に・・・と、こういうことだろう。

こういう感情が豊かなところは、子供らしくて可愛いんだがなあ。

「あ、ば、じゃなくて綱手え」

「はい？なんでしょうか、師匠」

子供らしいんだけど。たしかに可愛いんだけど。  
いかんせんオレら同い年（肉体的にのみ）。

しかも相手はオレを嫌っているわ警戒してくるわ。  
しまいには丁寧語ときた。

他人行儀過ぎる。

向けられる表情も目も冷たいままだし・・・。

こんな“綱手ばあちゃん”いやだ。

思わずひきつりそうになった顔を一生懸命気合いだけで押しとどめ、  
オレは一度大きなため息を吐き出し、毛を逆立たせるネコのような  
綱手に苦笑を浮かべる。

「前から何度も言ってるが。

たのむからお前はオレに丁寧語を使うな。素でいてくれ」

だって、ばあちゃんに丁寧語で話されると怖くてしょうがない。

あ、いまは「綱手」だったな。

ややこしいな。

だんだんごちゃごちゃしてきた頭の中をいったん整理すべく、赤い

自分の髪をわしわしとかく。

髪の毛でもひっぱったら少しは、痛みで頭もスッキリするだろうという甘い考えだ。

だが

無理です。と、即答でキツパリザックリと綱手によって切り捨てられたオレは、その場にガクリと思わず膝を付いた。

自分がばあちゃんと慕っていたあの豪快な人が、オレを師匠と呼び、まじめな顔で意見を求めてくる。それも丁寧語で。

いったいどういう状況だと、思わず叫びたくなったことは数知れず。耐えるオレ。結局はオレがなれるしかないのだろう。

そのあとは、綱手から信頼を得なければだめだ。

本当は今すぐいろいろやってしまいたい。

むしろ、喉をかきむしって雄叫びを上げて、変化を解くか変化でもして“ナルト”の姿を見せて「ばあちゃんは、ばあちゃんなんだから！オレのことナルトってよべってばよ！」とか言いたくなる。

それをこらえることがどれだけ辛いか。はがゆいか。

むかしから「ばあちゃん」がいないときには、綱手と呼び捨てで呼んでいたこともあり、おかげで幼い彼女を「綱手」と呼ぶことに抵抗はない。

ただ、なんともいえずやるせないのだ。

どうやらしばらく、オレと彼女の静かな抗争は続きそうだ。

\*\*\*\*\*

この世界ではじめての弟子に、懇切丁寧に人体の仕組みから医術、医療忍術を教える。

話はたまにヒートアップして・・・

「細胞を活性化させる方法ってのがあってだな」

ときたま変な方向へ話は発展したりする。

「どんな術なんです？」

「ん〜。どんなってうずまき一族秘伝？」

「は？」

「ああ、大丈夫大丈夫。綱手はミトさんの孫だし、チャクラコントロールもいいかんじだし、チャクラ量も多いから。できないなんてことはないさ」

「あ・・・いえ。そういうことをきいているわけではなくて（なぜあんたがうずまきの秘伝をしっているか聞いているんだよ！？）」

ん？ なにかサクラの心の内をかいまみたかのような、副音声が入ってきたような気がしたが。

まあ、顔に出やすい子だからしょうがないかもしれないけど。

やっぱり疑われているようだ。

うん。でもそういう子の意外な顔が視たくて、イタズラ心つてまらないんだよね。

そんなわけで。彼女が言いたいことはわかるが、無視する方向で

「っと、いうわけで」

話を切り返す。

「どんなわけだ!!」

おもいつきり綱手ばあちゃん（若）につっこまれた。拳じゃなくて、怒鳴られただけでよかった。

ちなみにすっかり素が出ていたが、それはそれ。

「っで、だ。それではお披露目!!」

【肉体の肌をピチピチにたもっておける超極秘忍術の巻き!】とくとみよ。この華麗なる術式を。ちなみにそれを開放するといっと、肉体の細胞は活性化し、傷も治る!チャクラ量もあがる!!ただいろいろ副作用もあるけどね」

「はあ!？」

「うん。さすがに医者でも何でも治せる万人はいないわけで副作用はどうしてもしょうがないんだよ。なにせ人間の細胞には限度があるからな。

ん。まあ、いいよ。とにかくおぼえよう!はい、やれ」

なぜか話の流れで、原作でミトさんや綱手がやっていた額にひし形の忍術を教えることになった。



それよりなぜか綱手に「有り得ない。有り得なすぎる!!」と激しくつつこまれたけど無視した。

だって女の子はいつまでも若くいたいものなんだろう？

あとは あれか。

女子といえば・・・

「あ、そういえば胸を大きくする方法って知ってるか？」

結局、綱手はうずまき一族の秘伝より、胸の話にくいついてきた。それ以降、なつかれた。

笑顔も向けてくれるようになったし、素のあの勇ましい口調で話しかけてくれるようになった。

「・・・・・・・・女ってこわい」

ゝ 師弟 ゝ

（師匠、アザナ師匠！！）

（ゴフツ！！！！）

（寝ないでください師匠！！）

（い、いや…寝たくて寝てるんじゃない、お前の拳が腹に…だつてだよ）ガクリ

（ししょー！！！！！！？）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5351t/>

---

ナルトなのに大蛇丸

2011年9月13日15時41分発行